

## 企業にIS部門は必要か (上)

宇高 直史

ちょっと**刺激的**なテーマなのですが、情報処理学会の80%以上が企業のSEの方々であるということから、あえてこのお話をさせていただくことにしました。

というのは、この厳しい経営環境の中、リストラ・分社化というのはずっと叫びつづけられており、IS (情報システム) 部門も例外でない、それどころか主要なターゲットの1つとなっています。そこでこの原因をさぐりながら、企業におけるIS部門や構成員のSE、そして企業のITの取り組み方についての今後について考えていこうと思います。

**はっきり言って** IS部門というのは社内の他部門から例外なく評判が悪い。「何をやっているか分からない」「業務そのものが分かっていないので役に立たないシステムばかり作る」「コンピュータシステムありきで話をしたが、我々が欲しいのはソリューション、それも導入ユーザ部門が儲かるソリューションだ」「何を言っているのか分からない。我々はコンピュータの素人なのだから、ユーザの理解できる言葉で説明して欲しい」「ちょっと改訂するだけなのに、ちょっとしたサポートだけなのに、結構な費用がかかる」等々等々.....

もちろんユーザ側に問題がないわけじゃない。業務分析も仕様も不十分のままIS部門に開発を依頼し、システムテストも終わった段階でドラスティックな仕様変更を言い出したり、アフターサービスはタダと勘違いしたり、「社内なのでそんなこと分かってるだろう」「同じ社内だから安くしてよ」といった甘えた態度も目につきます。

しかし**IS部門**に非がないと思えない。やはり会社の経営を担っている情報システムを構築しているのだから、自分が携わっているシステムはどういう効果があるのか、どんな業務をサポートしているのか自覚していただきたいし、なぜこんな費用がかかるのか、IS部門は日々どうやってユーザをサポートしているのかも、積極的に分かりやすく説明して欲しい。

ここまで読んでいただければお分かりいただけると思いますが、両者には大きなコミュニケーション不足とお互いを理解しようとする努力不足があります。このような両者の溝を埋めていかなければ、表題の「企業にIS部門は必要か」というどころか、「ワケの分からない部門を雇うことはない。どうせ分からないのだからアウトソーシングしてしまおう」という乱暴な結論になっても、ちっとも不思議ではありません。

そこで今回は「どうやって溝を埋めるか」というお話をさせていただき、「企業にIS部門は必要か」の議論ができるレベルを見つけたいと思います。

参考文献

1) 加藤忠宏: インターネット時代のSE分類学, 技術評論社 (1996).

